鷹の目の狩人 X

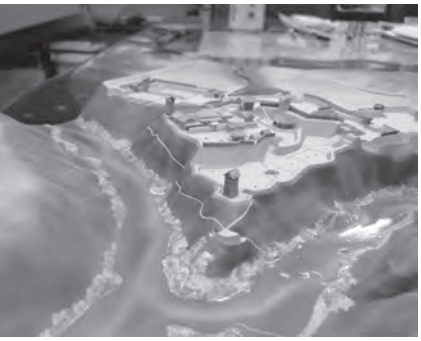
城に見る夢

しろはく古地図と城の博物館富原文庫
代表 富原　道晴

城郭調査のフィールドワークは、中学時代から始まり、以後53年に及ぶ。全国の城跡数千カ所を歩き、ある時は高さ30mの大坂城南外堀をロープ1本で昇降し、石垣刻印調査に携わった。また、ある時は名古屋城天守台によじ登り、加藤肥後守の巨大な刻印を拓本に取り、さらに、加越国境の戦国時代の佐々と前田の戦跡の城跡を縄張調査し、図説中世城郭事典を作成、教育委員会の依頼で城郭所在調査等、全国各地の古城を歩き、戦跡を訪ねた。

城郭資料コレクターとしては、学術資料としての中世古城絵図、近世諸大名の城郭修理絵図、江戸期の軍学城築絵図、幕末砲台台場絵図ばかりか、城の屏風、巻物、酒の容器、鳥籠、包装紙、ラベル、切手、重箱、絵画と城に関するものであれば、なんでもありである。特に中世古城絵図では、国会図書館、池田文庫、浅野文庫、蓬左文庫、内閣文庫、加越能文庫等大名家の所蔵量に引けを取らない。これら完成された機関では新たに資料が増えることは殆どない。対して、こちらは現在進行形、まさに、現役コレクターであり、全国の古書店、骨董商から、御連絡をいただく。このところ戦国時代人気が高まっているが、全国に4万2千以上あるとみられる中世古城絵図への関心は殆ど見受けられない。オンリーワンの城郭絵図は城郭研究にとって貴重な学術資料であり、地域の教育委員会や研究者の閲覧希望は増大している。

博物館事業としては、ホールでの研究者限定公開も行ったが、今は各地教育委員会と協賛で公開展示会を行っている。また、城郭情報を不定期ながら研究者にメール発信し、お互いに不要な貴重資料の交換会も実施した。基本となる、城郭の悉皆調査の報告書も最近は殆ど非売品で研究者は入手できない。戦後、城郭研究は長い間、民間研究者のみが行い支えてきた。大学関係者や教育委員会からは見向きもされなかった。当時の文化庁が城郭調査を開始したのはこの30年くらい前からである。学会が重い腰を上げ、城を研究対象として認知したのもその頃である。全国の博物館や郷土資料館も購入予算がなく、閉館に追い込まれている。そこには、間違った文化財行政があるとしか思えない。



長篠城立体模型

武州松山城絵図

城に魅せられて、恋焦がれた所以を尋ねられる。城は時の最大の技術を結集し、味方の勢力を守備するために構築される。負ければ、滅亡あるのみであり、そこに時代の最高の技術と洗練された機能美が生まれる。明治以降、兵器の進歩で単なる大砲置き場に変化したが、戦国時代に数万も構築された中世古城は本当にすぐ近くにあり、小城といえども、そこには如何にも人間が考え尽くして構築した成果を見ることができる。

城の構築は選地、縄張、普請、作事という工程で行われる。戦地は地を選ぶ、つまり、築城場所を決めることで、敵の所在地域、兵力、自らの兵力地域、兵力、同盟軍の位置、街道の位置、山の高低、河川の状況等、あらゆる可能性が検討され、攻めてくる対外勢力に如何に対抗するかを考える。企業が支店、営業所をどのように配置するかと同様である。縄張は城の平面構成で、武田流等構築者によって特徴が出る。地形を検討した上で、空堀や水堀、横堀、堀切、竪堀、畝堀、土塁、櫓台が切岸という急斜面で以て、敵を寄せ付けないように構築される。企業ではどのようにそこに人を配置するかであり、能力、人数が検討され、如何に強力な拠点となるかが決まる。普請は土木工事であり、防衛上はもっとも重要な現場作業となる。山を削り、堀を掘り、その土を内側に盛り上げ土塁とする。河川から水を引き、敵の進入路を遮断する。作事は建築工事であり、ここでも、銃眼による防衛機能や見晴らしのための櫓が構築される。天守は城の象徴であり、指揮所となるが、幕末には単なる砲撃の対象とされた。

鉄壁の城は存在しない。援軍のない城は必ず落城する。秀吉の難攻不落の要塞、大坂城は落城した。拠点の構築に勝る企業として、あらゆる防衛体制、戦略はできていますか。